

連載：ベテランの方から若手図書館員へのメッセージ 8

これからの図書館を担う人たちに向けて



鈴木 正紀

1. 「わたし」について

1992（平成4）年4月、30歳の時に私は現在の職場である文教大学に職を得、現在に至っています。本学では図書館員はその枠で雇用されるので、図書館勤務は入職以来今年度で27年目となります。現在は越谷図書館ですが、この間短期ではありますが、茅ヶ崎にある湘南キャンパスの図書館にも勤務したことがあります。

図書館員としてのスタートは30歳の時でした。それまで私は何をしていたかという、大学学部を卒業後、千葉県の高専の社会科教諭（日本史）として働いていました。それを4年たった時点（28歳）で辞め、現在は筑波大学と合併しましたが、当時つくば研究学園都市にあった図書館情報大学の大学院（修士課程）に入り、図書館情報学の学習（図書館については無知に近い状態だったので学部の概論を聴講したりしていました）と研究を行い、修士号を取って修了。就職活動のなかでたまたま縁あって現在の職場に職を得ることができました。

2. 図書館との出会い

私の人生、特に前半のなかで「図書館」——公共図書館、学校図書館、大学図書館——はいずれも私の生活圏とはあまり縁がありませんでした。生まれ育ちが比較的田舎であったので公共図書館なるものは身近にはなく、学校図書館は小学生・中学生のときにはほとんど閉まっていて、使った記憶はわずかしかありません。大学図書館はどうだったかという、当時は新築できれいな建物でしたが、そこにある図書を借りて読むとかはほとんどせず、自分が書店で購入した書籍を読む、い

わば「場所借り」で図書館を使っていたにすぎませんでした。大学図書館というものがどういうものであるか、在学中に教えられたことも考えたこともなく、そのまま卒業をしてしまいました。卒論さえ、そんな態度であっても書いてしまったのだから不思議です。

そういう私が20歳代も後半になってなぜ大学図書館で仕事をしたいと考えたのか？ その理由のひとつは卒業後に教員として仕事をした4年間の経験にあります。

辞めた理由をすべて述べることはしませんが、図書館との関連でいえば、自分の担当した教科が社会科であり、日本史であった、ということがとりわけ影響したと思います。この教科目、一般的なイメージとしてあるのは「暗記科目」ということです。学部でそれなりに歴史を学んだものとしてそうした認識は違うのだ、ということはおわかっておりながら、それを生徒に伝えきれないもどかしさを常に抱えていました。大学受験を意識した授業をする必要はない学校でしたので、担当した授業ではいろいろな試みをしてはみたものの、生徒の「暗記科目」という固定観念を覆すまでには至りませんでした。

そんななか、いつのまにか、生徒に対して伝えるべきは、教科書に書かれていることがらを覚えさせるのではなく、生徒自らが必要な知識を獲得する、そのための方法を伝える、その手ほどきすることのほうが重要なのではないかと考えるようになりました。なぜそうした方向へ考えがシフトしたのか、その理由は今もってわかりません。ただ、そのための場として図書館というものがある、ということで、私の人生の中でほとんどはじめて「図書館」というものが具体的なものとして

目の前に現れました。

教員3年目の秋口頃、そのことを強く思うようになり、職場の学校図書館の司書の方にそんな話をしたところ、つくばに図書館情報大学というのがあるよ、と教えてもらったのではなかったかと思います。

3年目の秋の段階で大学院への進学を志しましたが、資料を見たところその年の受験にはすでに間に合わないことがわかったので、翌年の受験を目指して語学の勉強などを行って試験に備えました。

このとき、大学院ではなく、学部3年に編入する方法があるというのは、入学して気づいたことでした。3年次編入と大学院、どちらも2年間ですが、図書館員になるための実務を学ぶには前者のほうがいいのではないかと思います。私自身、目録法ひとつきちんと学んだことがなく、その点はいまでも苦労しています。しかし、大学院で学ぶということは学部では学べない世界に触れることができます。それはなにより、修士論文を書くという経験です。これは現場に入って学生や教員と話す際、自分の「強み」として生きたと思います。学部でも卒業論文を書くということはありませんが、修士論文はそのレベルでは立ち行きません。

ともあれ、2年間で修了することができ、冒頭に書いた通り就職もできました。

図書館への「転身」の理由はこのようなものですが、そのことは、大学図書館の現場に入って「図書館利用教育」「情報リテラシー教育」という文脈で語られていることを知りました。学校教育関係者のなかではほとんど通じない話が、図書館の世界では普通に語られていることをうれしく思ったものです。

3. 記憶に残ること

30歳が図書館員のスタートであった私は、ともかく食欲に学ぶ必要がありました。職場での経験もそうですが、私の職場のような中堅の文系私立大学は、たとえば学術情報流通という点では、どうしても最前線の動向は黙って待っているだけではわかりません。業務として外国雑誌を担当していた私は、当時、Swetsという外資系企業が新しい一括納入方式をひっさげて大学図書館に大きく入り込もうとしていた時期であり、他大学図書館の動向を知る必要がありました。そのためには人

脈を広げなくてはなりません。いろいろな研究会などには精力的に顔を出し、名刺を配りまくりました。

そうしたなかで、記憶に残るのは、他大学の先輩図書館員からもらった「ことば」です。入社して間もないころ、東京で開催された研究会の後か何かだったと思いますが、終了後の懇親会でいわれたこと。「おまえ、図書館で何やりたいんだ？

やりたいこと持ってないとすぐダメになるぞ！」

この言葉はいまも忘れずに自分への戒めとなっています。言葉を変えていえば、自分にとって図書館は「目的」なのか「手段」なのか、ということです。私にとっては手段です。何が目的か、それは上で述べたように、人が学ぶべきは、知識そのものではなく、それを探し出す知識で、それを身に付ける場が学校であり、そこにある図書館は、それに中心的役割を果たしうる場だと思っているのです。そうした態度を身に付けた人間は主体的な個人として生きていく基礎を身に付けたことになる。「自立/自律した人間」の育成が私の目的です。

4. 若手図書館員へのメッセージ

そうはいっても図書館の仕事の一つ一つはどれも面白いものです。これまでのあいだ、私は逐次刊行物業務、レファレンス業務、総務担当として図書館の業務管理システム導入、機関リポジトリ構築などなど、面白い仕事をいくつも担当させてもらいました。面白くないと仕事への意欲がわくはずがありません。

国立情報学研究所が主催する大学図書館職員短期研修⁽¹⁾というものがあります。この講座の一角に「大学図書館職員のスキルアップ法」というものがあり、2007(平成19)～2009年度までの3年間担当しました。若い人たちに伝えたいことはそこで言い尽くしたと思っています。すでに10年くらいたっていますが、図書館員として成長するための方法は、現在も当時述べたことと基本的には変わっていないと思っています。

(1) <https://www.nii.ac.jp/hrd/ja/librarian/result.html> (参照：2019/4/20)

(すずき まさのり・文教大学 越谷図書館 館長補佐)